

Title	Japanese Gender-related Discourse Strategies in Preschool Children's Language Acquisition
Author(s)	仲田, 陽子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43282
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	仲 田 陽 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学位記番号	第 17160 号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	Japanese Gender-related Discourse Strategies in Preschool Children's Language Acquisition (子供の性別による日本語の談話ストラテジーの習得について)
論文審査委員	(主査) 教授 津田 葵 (副査) 教授 沖田 知子 助教授 日野 信行

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語の言語習得過程において、どのように子どもが性別による談話ストラテジー (discourse strategies) を習得しているのかを実証的に分析し、日本語における性別による言語習得の一端を明確化した。

以下、本論文の内容を各章ごとに述べる。

第1章では、言語と性差研究について概観した。まず、1) 大人と子どもの相互作用、および2) 子ども同士の相互作用の言語習得過程を包括的に分析することにより、性別による言語習得について研究を行う必要性を論じた。特に、上記1) に関して、従来の研究では母親と子どもの相互作用がほとんどであるが、この研究においては、父親との会話も研究範囲に取り込んだ。また、性別による日本語の言語習得研究がほとんど行われていない。従って、言語使用の性差を解明するには、実際に子どもが言語を習得する過程において、性別による談話ストラテジーを習得していく実態を調べることにより、量的・質的な側面からの体系的な研究が可能であることを説いた。

第2章では、方法論について述べた。研究の枠組みは、実際の会話を言語的および非言語的側面からより包括的な談話分析を目指す相互作用の社会言語学を用いた。データは、参与観察法でビデオに録画し、それを文字化したものを分析に用いた。大人と子どもの相互作用について、2歳児グループ、3歳児グループに分け、縦断的方法と横断的方法で約1年、2歳、3歳男児と女児それぞれ5名ずつ、計20名とその母親20名、父親13名との会話を収集した。収集したデータは、一家庭につき一回約90分の計6回、総計約180時間である。子ども同士の相互作用については、縦断的方法で、約1年間、大阪府内の幼稚園2カ所 (S, K幼稚園) で、3~4歳児のクラス (男児計29名、女児計26名) の自由保育の時間を、30回、計約24時間収集した。

第3章では、大人と子どもの相互作用を分析した。特に日本語において性差が顕著に表れる終助詞・文末表現に焦点を当てた。大人が子どもの性別に応じて、どのようにスピーチ・スタイル・シフトを行っているのか、異性同士の相互作用 (父親と女児、母親と男児)、同性同士の相互作用 (母親と女児) において質的な分析を行った。その結果、大人は、子どもの性別に応じた終助詞・文末表現を、①指示、②他者 (玩具、人物) の代弁、③子どもの行動および気持ちについて、④経験を共有、⑤感情を共有、⑥子どもに対する質問、⑦子どもの発話に対する応答、⑧動的活動 (母親と女児が、男性の多用する終助詞を使用) の場合に使用しているのがみられた。また、大人が談話ストラテジーの指示ストラテジーを子どもの性別に応じてどのように使用しているのか、下記の分類に基づき分析を行った。

直接的指示ストラテジー：

- 1) 直接指示、2) 丁寧表現、3) 禁止、4) 義務、5) 陳述、6) 指示、7) 慣例的表現指示

間接的指示ストラテジー：

- 1) 提案、2) 希望、3) 優先、4) 質問（意志確認、依頼、示唆的質問、確認、修辭的質問、可能）5) 許可、6) 感情移入、7) 帰属的指示、8) 暗示、9) 批判、10) 理由づけ、11) 条件提示、12) 警告

量的側面から分析した結果、2歳4ヶ月、2歳10ヶ月、3歳4ヶ月、3歳10ヶ月の子どもに対して、母親は、直接的指示ストラテジーを男児に対し多く使用する傾向が顕著にみられた ($t=6.7888$, $p\text{-value}=0.0000$)。また、父親は、同じ男児を持つ母親にくらべ、男児に対して直接的指示ストラテジーを多く用いる傾向が顕著であった ($t=2.3138$, $p\text{-value}=0.0148$)。さらに、男児の父親は、女兒の父親に比べ、直接的指示ストラテジーを多用する傾向が非常に顕著にみられた ($t=3.5309$, $p\text{-value}=0.00205$)。質的分析結果として、父親・母親は共に、提案、質問の示唆、暗示という間接的指示ストラテジーを多く駆使していた。特に、母親は、第三者の意図をくみ、自発的な行動を促す帰属的指示、子どもが不適切な行為をした場合に否定的かつ不快な感情を示すことで行為を改めさせる感情移入を多用していた。丁寧表現は、女兒の母親がほとんど使用しているのに対し、男児の父親はほとんど使用していなかった。また、2歳男児の母親は、3歳男児の母親に比べ、丁寧表現を多く使用していた。母親と女兒は、ごっこ遊びにおいて、想像のストーリーを作り上げ、ごっこのフレームトークを用いて間接的に指示を行っているのが見られた。

次に、男児・女兒が、大人に対してどのように指示ストラテジーを用いているのか、2歳4ヶ月、2歳10ヶ月、3歳4ヶ月と月齢別に量的側面から分析した。その結果、2歳4ヶ月では、指示ストラテジーの使用に性差はみられなかった。しかし、2歳10ヶ月、3歳4ヶ月になると、男児は直接的指示ストラテジーを、女兒は間接的指示ストラテジーを母親に対して多く用いる傾向が顕著にみられるようになった (2歳10ヶ月： $t=2.3612$, $p\text{-value}=0.02515$ 、3歳4ヶ月： $t=4.3882$, $p\text{-value}=0.0016$)。質的側面からの分析においては、子どもたちが直接的指示ストラテジーの直接指示にはじまって、2歳10ヶ月頃から多様な間接的指示ストラテジーを次第に習得し、対人関係などのコンテクストにおいて使い分けができるようになる過程が見られた。

第4章では、子ども同士の相互作用について、子どもが、どのように談話ストラテジーを用いているのか、同性同士および異性間の協調的会話と衝突的会話を中心に分析した。量的な分析結果から、同性同士の協調的会話では、男児は直接的指示ストラテジーを、女兒は間接的指示ストラテジーを多用する傾向が見られた (S幼稚園： $t=2.8478$, $p\text{-value}=0.00735$ 、K幼稚園： $t=7.7075$, $p\text{-value}=0.00005$)。また、質的な分析結果からは、男児・女兒は、直接的指示ストラテジーの直接指示を用いる場合、それぞれの性別に応じたふさわしい終助詞を付加しているのが見られた。間接的指示ストラテジーについては、男児、女兒は共に、提案を多く使用していた。女兒は、ごっこ遊びの際に、ごっこのフレームトークを用いて、指示を行っていた。この理由として女兒はそれぞれのごっこのフレームにおいて、相手との関係を重視し、ごっこのフレームトークを用いたり、間接的指示ストラテジーを多用していたと考えられる。一方、男児もごっこ遊びに従事していたが、ごっこのフレームトークで指示を行うことは、見られなかった。

次に、衝突的会話について述べる。話し手のアジェンダのみを追求する一方向性談話ストラテジー、話し手・聞き手双方のアジェンダを追求する双方向性談話ストラテジーの分類 (Sheldon and Johnson : 1998) に基づき、男児・女兒がどのように対人関係を築いてゆくかを考察した。量的な分析結果として、男児は、一方向性談話ストラテジーを、女兒は双方向性談話ストラテジーを多用する傾向がみられた ($z=4.360$, $p\text{-value}<0.00003$)。質的側面から見た場合、女兒は双方向性ストラテジーを多用していることから、衝突的会話が回避され、和解の件数が多くなっていた。男児の会話では、個人の権利に重きを置くことが多く、一方、女兒の会話では、グループの関係づけに重視した発話が多く見られた。例えば、女兒は「みんなで～」というルールを提示したり、じゃんけんのように公平に判断される手段をとったり、ルールの例外をつくりあげ、衝突を回避することが見られた。

最終章、第5章では、大人と子どもの相互作用および子ども同士の相互作用を総合的に分析した結果、以下のような点が明らかになった。1) 女兒は、大人が女兒に多く提示していた間接的指示ストラテジーを、男児は、大人が男児に対して多く提示していた直接的指示ストラテジーを多用するという傾向が見られた。2) 母親や女兒は、間接的指示ストラテジーを多く用いていた。間接的指示ストラテジーは、話者の意図が、間接的に伝達されることから、話

者の心を深く読みとることが要求され、相手との心的距離が短くなる。女兒と母親の関係、また、女兒同士の関係は親密であることから、間接的指示ストラテジーを多く用いるものと考えられる。3) 女兒は、母親や同性同士の同年者と、ままごとなど想像上のストーリーを作り上げていくごっこ遊びに従事することが多い。4) 一方、男児は、ブロックの組み立てや、ロボット、車など動く玩具を用いたり、動きを伴う現実的な遊びが多かった。このような3)、4)の遊びの違いも、性別による談話ストラテジーの違いを生み出す要因の一つであると考えられる。

英語の先行研究結果とは異なる点として、母親が帰属的指示や感情移入を多用する傾向や、男児と女兒が共に提案を多用する結果が見られた。今後、他の文化の言語使用において、似通ったデータに基づき、対比することで、性別による談話ストラテジーの明確な体系化を目指したいと考えている。また、本論文では、子ども同士の会話で、同性同士の会話に重点を置き分析を行ったが、現実の社会で男性女性が共にコミュニケーションを行っていることを考えれば、さらにデータ数を増やし、異性間の会話についても分析・考察を行うことで、性別による談話ストラテジーがさらに解明されると考えられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本人の子どもが母語の日本語を習得する過程において、どのように性別による談話ストラテジーを習得しているのかを実証的に分析し、その一端を明確化したものである。

本論文の特徴は、大人と子どもの相互作用と子ども同士の相互作用という言語習得過程を通して、縦断的方法とある時点で異なる被験者を調査する横断的方法を併用し、2歳から4歳までの子どもの言語習得データを、約1年間、定期的に収集し、質的・量的側面から捉えていることにある。また、大人と子どもの相互作用について、従来の研究で行われていない父親との会話についても考察を行っている。欧米では、このような言語習得研究が1960年代から盛んに行われているが、日本語において、性別による言語習得研究は体系的にほとんど行われていない。このことから、今後の言語習得研究および言語と性差研究への大きな貢献となる。

研究の結果、男児は話者の意図が文字通り示される直接的指示ストラテジーを、女兒は話者の意図が間接的に伝達され、聞き手がそれを推測しなければならない間接的指示ストラテジーを、2歳10ヶ月頃から次第に習得していくことが明らかにされた。このような言語使用の性差は、親が子どもにどのような指示ストラテジーを用いているのかを見た場合、男児には直接的指示ストラテジーを多用し、一方、女兒には間接的指示ストラテジーを多用する傾向があった。つまり、父親・母親との相互作用に密接な関係がある。データからも統計学上有意であることが裏付けられた。また、子ども同士の会話を協調的会話と衝突的会話に分類し、どのような談話ストラテジーを用いて、対人関係を維持しているのか、また、英語の先行研究とは異なる談話ストラテジーの使用をも明示しており、示唆に富む談話分析研究である。

しかし、今後の課題として、子どもが、家庭から学校という社会への広がりの中での相互作用を通して、どのように性別による談話ストラテジーを習得していくのか継続的な研究を行い、言語使用における性差をさらに解明していく必要があろう。とはいえ、本論文の優れた成果が損なわれるわけではない。本審査委員会は本論文を博士(言語文化学)の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。